

# 新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の関連： 問いとしてのスピリチュアリティの部分媒介効果

村上 祐介 関西大学文学部総合人文学科\*

The relationship between fear of COVID-19 and university adjustment:  
The partial mediating effect of spirituality as big life questions

MURAKAMI Yusuke

## 問題と目的

2019年以降、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が人々の命を脅かし、心身の状態や社会生活に少なくない影響を及ぼし続けている。日本で実施された調査では、2020年4—5月にかけて36.6%が中程度の、11.5%が重度の心理的ストレス反応を示し (Yamamoto et al., 2020), 同年5—8月には成人の希死念慮が増加したことが明らかになった (Sasaki et al., 2021)。中でも大学生は、授業や課外活動等様々な学生生活領域で変化が生じており、2019年から2021年にかけて希死念慮の高リスク群の割合が微増するなど (Horita et al., 2022), 適応上の問題が散見される。そこで本研究では、COVID-19に対する恐怖と、大学生の適応感の関連、ならびにこれらの関連をスピリチュアリティが媒介するかについて検討することを目的とし、コロナ禍の大学適応の理解に資する知見を提供したい。

## コロナ禍での大学適応

適応感とは、「個人が環境と適合 (フィッ

ト) していると意識すること」(大久保・青柳, 2003, p.38) である。大学入学前に、友人関係や学業への期待が高いほど適応感も高く (千島・水野, 2015), 初年次キャリア教育を通じて大学生活でやりたいことが明確になるほど、生活適応や学び適応も高いこと (神原他, 2019) が明らかになっている。大久保・青柳 (2003) の調査では、大学生活に対する様々な主観的意味づけという観点から適応感を測定する尺度が開発され、気楽な居心地の良さの指標である「居心地の良さの感覚」、他者からの信頼感や受容感の指標である「被信頼・受容感」、課題や目的のあることから生じる満足感の指標である「課題・目的の存在」、他者からの拒絶感や疎外感の指標である「拒絶感の無さ」という4下位尺度が抽出された。本研究では、コロナ禍により、大学での交友関係の構築に一定の制約が生じていることを考慮し、対人関係の質に直接影響を受けることが予想される「居心地の良さの感覚」、被信頼・受容感、「拒絶感の無さ」といった側面ではなく、「課題・目的の存在」に焦点を当てたい。課題・目的の存在は、大学で自分のためになることに従事し、成長できていると感じるような充実感を抱き、様々なことへの動機づけが高い状態を捉えた下位概念であることから (大久保, 2005), 限られた人間関係の中であっても、学生が学ぶべきことを見つけ、やり

\* y\_mura@kansai-u.ac.jp

関西大学文学部総合人文学科

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

がいをもどの程度感じているかを捉えることができるだろう。なお、本論文の以降の議論では、課題・目的の存在のみに着眼するものの、便宜上「適応感」という表記を用いることにする。

大学での適応感に影響を及ぼし得るコロナ禍特有の要因として、COVID-19への不安や恐怖が挙げられる。しかし、新型コロナウイルス恐怖と、抑うつや不安等の精神的不健康との間に一定の関連は確認されるものの (e.g., Şimsir et al., 2022), 本研究で焦点を当てる学業的な適応感との関連については不明な点が多く、知見も十分に蓄積されていない。大学生対象のCOVID-19ストレス尺度を開発した研究 (Yong & Suh, 2022) では、新型コロナウイルスに関する健康関連のストレスは、学業面・対人関係面・心理面を全般的に捉えた大学適応感と極めて弱い負の相関を示すにとどまった (女性:  $r = -.16$ ; 男性:  $r = -.19$ )。イタリアの大学生を対象とした研究では、所属コースでの学びに対する満足感は、COVID-19に関する個人的リスク知覚とは無相関 ( $r = .02$ ) であった (Capone et al., 2020)。いっぽう、トルコの大学で実施された調査では、社会的問題解決スキルを独立変数とした構造方程式モデリングが実施され、媒介変数である新型コロナウイルス恐怖は、仮説に反し、学習意欲と有意な正の関連 ( $\beta = .13$ ; 単相関:  $r = .09$ ) を示していた (Günaydın, 2022)。オンラインでの学習意欲や満足度に関する研究に目を転じると、ヨルダンでは、新型コロナウイルス恐怖と、オンラインでの学習満足度は強い負の相関 ( $r = -.70, p = .05$ ) を示した (Al-Nasa'h et al., 2021)。しかし、新型コロナウイルス恐怖とオンライン学習での社会的存在感 (快適度や満足度) との間に、パキスタンでは心理的意欲 (オンライン学習への関心) の正の媒介効果が見出されたが、マレーシアではそのような媒介関係は確認されなかった (Munir et al., 2021)。

以上の横断的な研究は、COVID-19に対する恐怖と、大学での適応感や学習意欲・満足度 (オンライン学習を含む) の関連性は一貫しないことを示しており、感染症への恐怖や不安が両義的な影響を及ぼし得ることを示唆している。新型コロナウイルス恐怖がもたらすネガティブな影響に焦点をあてれば、こうした不安にうまく対処できない場合、大学での正課内外の諸活動が制限され、在学する意味が見出せず、動機づけや適応感が低下してしまう学生もいるだろう。

いっぽう、死の顕現化が目下の活動への関心や関与、有意義度を高める、という従来の研究知見は、新型コロナウイルス恐怖と学習意欲や満足感との正の関連を理解する視点を提供するものである。Ma-Kellams & Blascovich (2012) の研究では、東洋のホリスティックな思考は、死を生と密接に結びつけて考える傾向にあるため、死に触れることはより良い生を得ようと努力する傾向を促進するのではないかと予想された。実験を通じてホリスティックな思考スタイルを操作されると、自らの死について考えた条件で、統制条件に比べて、日常生活の活動により興味や関心を示すことが明らかになった。また別の実験では、日ごろ人生の意味を見つけないと感じているほど、死について考える操作を受けると、人生の有意義さをテーマとした映画により感銘を受けることもわかっている (Hofer, 2013)。これらの知見を援用すれば、COVID-19に対する不安や恐怖から死を意識した場合、生の有限性を自覚することで、目下の活動に関心を示し積極的に関与する傾向が高まるかもしれない。特に、コロナ禍2年度目 (調査実施時) で新たな生活様式が徐々に浸透している状況では、大学での正課内外の活動もオンライン等を併用しながら展開されており、その中で充実感ややるべきことをやれている、という感覚を抱く可能性もある。

ここまで述べた通り、新型コロナウイルス恐怖が適応感に及ぼし得る影響は一義的ではないものと思われる。特に、感染による死の恐怖を伴う不安への対処は学生によって様々であることから（Munir et al., 2021）、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の関連について明らかにするためには、これらの変数間を介在する他の変数に着目する必要があるだろう。

## スピリチュアリティの媒介効果

**新型コロナ恐怖とスピリチュアリティ** 本研究では、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感を媒介する変数としてスピリチュアリティに焦点をあてたい。スピリチュアリティとは、「人間に本来的に備わった生の意味や目的を求める無意識的欲求やその自覚」（安藤, 2007, p.29）と定義されることもあるが、多様な下位概念を含み（e.g., 田崎他, 2001; 濁川他, 2016）、一様な定義が難しい構成概念である。そこで本研究では、スピリチュアリティのうち、人生の究極の意味・目的を自覚的に問題にしてゆこうとする「問いのスピリチュアリティ」（林, 2011）や、人生の大きな問い（Big question）に対する答えを積極的に探索する「スピリチュアルな探求」（Astin et al., 2011）に着目する。ここでの大きな問いとは、「自己、世界、超越的存在の在り方や、生の意味、死や愛、価値など人生の根本的な問題」（村上, 2020, p.141）である。換言すれば、「個人が大きな問いについて思慮する傾向」をスピリチュアリティと操作的に定義する。なお、本研究では、超越的次元に関する問いと、適応感の課題・目的的存在の相関が極めて弱いこと（村上, 2013）や、項目数増加による調査協力者の負担を考慮し、Big Question 尺度（村上, 2012）の下位尺度である「人生の意味の希求」を使用する。

このようなスピリチュアリティは、新型コロナ恐怖という死を意識する心的状態によっ

て、より顕在化することが予想される。窪寺（1997）は、人は危機状況に陥るとスピリチュアリティが覚醒し、「超越者への関心」と「自己の人生への関心」を強く持ち始めると指摘する。また、東日本大震災後に実施された井上（2013）の調査でも、震災によって生き方や考え方で大きく変わったことがあるか、という質問に対して、35%の学生が「生きることの意味について真剣に考えるようになった」を選択している。これらの知見に基づけば、COVID-19により自他の生命が脅かされるという危機的な状況において、ネガティブな情動や思考が喚起されるほど、コロナ禍以前の人生に対する捉え方は再考を迫られ、自らの存在や人生の意味、価値といったものについて内省する程度が高まるのではないだろうか。日本人を対象とした調査では、COVID-19の拡大に対してストレスを感じている程度と、中核的信念（自己や世界に関する信念、世界観）の再検討との間に、正の関連が存在することが明らかになっている（Matsudaira et al., 2021）。

**スピリチュアリティと適応感** 大きな問いについて思慮することが大学生の関心の一つであるならば、スピリチュアリティは適応感と正の関連を示すかもしれない。適応感の一側面である、個人の欲求と学習環境からの供給の一致度を示す「欲求-供給適合（needs-supplies fit）」は、学業満足度を正に予測することが明らかになっている（Li et al., 2013）。コロナ禍以前でも、スピリチュアルな探求の得点が高い初年次生は、人生の意味を見つけることを大学入学の理由として重要視しており（Astin et al., 2011）、約2/3を超える大学生が、実存的な問いについて考えたり学んだりしたい（「望んでいる」と「やや望んでいる」を合算）と考えていた（村上, 2016）。そして、日頃から大きな問いについて考えたり学んだりしているほど、肯定的な未来志向を媒介し課題・目的的存在と正の関連

を示すとともに、探究心を媒介して学習への積極性と正の関連を示すことが明らかになっている(村上, 2013)。また、一般教養科目で大きな問いについて考えた頻度が高いほど、授業に対する積極性が高いことも示唆されている(村上, 2020)。適応感とは個人と環境との適合度であり(大久保・青柳, 2003)、自分なりに、あるいは授業や他者との会話を通じて大きな問いについて考える環境があることは、大学生のニーズを満たし、適応感を維持したり向上したりする可能性がある。

### 本研究の目的

以上の議論より、自他の生死について意識する新型コロナウイルス恐怖は、スピリチュアリティと正に関連するとともに、このような問いについて自ら、あるいは授業や他者との会話を通じて考える頻度が多いほど、自己と環境との主観的適合度である大学適応感も高いことが予想される。したがって本研究では、Figure 1の仮説モデルに示す通り、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感におけるスピリチュアリティの媒介効果を検証することを目的とする。なお、上述の通り、大学適応感の指標として「課題・目的の存在」、スピリチュアリティの指標としてBig Question尺度の「人生の意味の希求」を使用する。

### 方法

#### 調査時期と参加者

関西圏の私立大学で開講される教養科目(著者が授業担当者)の受講生を対象に調査協力を依頼した。協力者にはコースクレジットの一部が与えられたが、調査に参加しない場合にも成績評価上の不利益はないことが説明され、参加者は自発的に調査に協力した。個人の回答傾向を分析することはないため、安心して回答するよう伝えた。

当該科目は、感染拡大防止のため、年度当初より全て遠隔授業で実施された。調査は2021年5月21日-24日に、オンライン上で行われた。当該大学の所在地域で2021年度最初に発令された緊急事態宣言を受け、4月19日から5月11日まで対面授業は遠隔授業に切り替えられ、その後、再び緊急事態宣言が延長されたことに伴い、緊急事態宣言解除まで遠隔授業を継続することが通達された状況での依頼であった。したがって受講生は、学期開始から1-2回は履修科目のいくつかを対面授業で受講した後、1ヶ月にわたり、ほとんど大学には来学していない状況であった。

受講生291名のうち、259名から回答が得られ

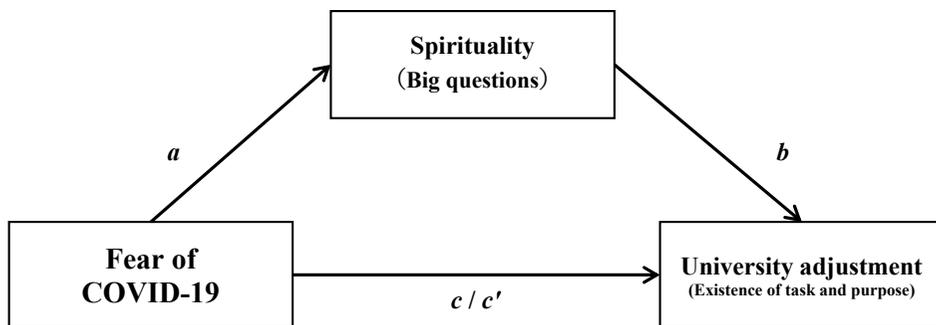


Figure 1 Conceptual framework of the study

た。このうち、注意チェック項目（「ここでは、ややあてはまる、と回答してください」と選択肢を指定）に誤答した6名、年齢が50歳代だった1名を除外し、最終的に252名（男性102名、女性147名、その他1名、不明2名； $M_{age} = 19.23, SD = 1.24$ ）を分析対象とした。

**倫理的配慮** 調査にあたっては、「調査目的の概略」、「回答は任意であること」、「回答を拒否しても不利益を被らないこと」、「データは厳重に管理しプライバシーは保護されること」について、調査画面上に事前に提示し同意を得た。本研究は所属機関の倫理委員会の承認に基づき実施した（承認番号：HLE-210430-A）。

## 質問紙の構成

**フェイスシート** 年齢、性別（女性、男性、その他）を尋ねた。

**新型コロナウイルス恐怖尺度** Midorikawa et al. (2021) によって翻訳された新型コロナウイルス恐怖尺度（Fear of COVID-19 Scale: FCV-19S）の日本語版を用いた。「新型コロナウイルスについて考えると不快になる」、「新型コロナウイルスで命を失うことを恐れている」、「インターネットで新型コロナウイルスのニュースや話題をみると、緊張したり、不安になったりする」等の7項目で、「1: 全くあてはまらない」—「5: とてもあてはまる」の5件法で回答を得た（ $\alpha = .79, 95\% \text{ CI} [.75, .83]$ ）。

**スピリチュアリティ** 村上（2012）が作成したBig Question尺度のうち「人生の意味の希求」尺度を用いた。「以下のような『問い』について、あなたは日頃（大学の授業や、他者との会話も含む）、どのくらい自分なりに考えていますか」と教示した。具体的な項目は、「人生で本当に大切なこと、すべきこと、したいことは何か」、「本当の幸せとは何なのか」、「生きることや人生に、意味や目的はあるのか」等の6項目で、「1: 全く考えない」—「6: よく考える」

の6件法で回答を得た（ $\alpha = .83, 95\% \text{ CI} [.80, .86]$ ）。

**適応感** 大久保・青柳（2003）によって作成された大学生用適応感尺度のうち、「課題・目的の存在」尺度を用いた。大学生活・環境についてどう感じているかを、「大学では、熱中できるものがある」、「大学では、やるべき目的がある」、「大学では、満足している」等の7項目で尋ねた。「1: 全くあてはまらない」—「5: 非常にあてはまる」の5件法で回答を得た（ $\alpha = .76, 95\% \text{ CI} [.74, .82]$ ）。

なお、質問票には、上記のほかに、今後の尺度作成の参考として回答を依頼した予備的な質問が3項目含まれていた。

## 統計分析

分析にはJASP version 0.16.4 (JASP Team, 2022) を用いた。媒介分析では、FCV-19Sを独立変数、スピリチュアリティを媒介変数、課題・目的の存在を従属変数とし、年齢と性別を共変数として投入した。媒介効果の推定にはブートストラップ法（反復回数5000回；バイアス修正パーセントイル法）を用いた。なお、各変数（年齢、性別）や尺度に1—4個の欠損値が含まれていたため、完全情報最尤法による推定を行った。

## 結果

### 各変数の記述統計と相関分析

各変数の平均値と標準偏差、変数間の相関係数をTable 1に示す。FCV-19Sとスピリチュアリティ、課題・目的の存在の間に有意な弱い正の相関が、スピリチュアリティと課題・目的の存在の間にも有意な弱い正の相関が示された。

Table 1 Mean, standard deviation, and correlations for the variables

Variable	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3
1. FCV-19S	17.59	4.58	–		
2. Spirituality(BQS-ML)	25.23	6.12	.25*** [.13, .37]	–	
3. University adjustment (Existence of task and purpose)	25.10	4.93	.18** [.06, .30]	.18** [.06, .03]	–

Note. FCV-19S, the fear of COVID-19 scale; BQS-ML, the Search of Meaning in Life subscale from the Big Question Scale. Values in square brackets indicate the 95% confidence interval.

\*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ .

### 媒介分析<sup>1</sup>

FCV-19Sから課題・目的の存在への総合効果は有意だった ( $c = 0.17$ ,  $SE = 0.06$ ,  $z = 2.79$ ,  $p = .005$ )。FCV-19S からスピリチュアリティへのパス ( $a = 0.25$ ,  $SE = 0.06$ ,  $z = 4.09$ ,  $p < .001$ )、スピリチュアリティから課題・目的の存在へのパスはそれぞれ有意だった ( $b = 0.16$ ,  $SE = 0.06$ ,  $z = 2.51$ ,  $p = .012$ )。FCV-19Sと課題・目的の存在の関連におけるスピリチュアリティの媒介効果は有意だったものの ( $ab = 0.040$ ,  $SE = 0.02$ ,  $z = 2.14$ ,  $p = .032$ , 95% CI [0.008, 0.091])、FCV-19Sから課題・目的の存在への直接効果は有意なままだった ( $c' = 0.13$ ,  $SE = 0.06$ ,  $z = 2.10$ ,  $p = .036$ )。結果を Figure 2 に示す。

= 2.51,  $p = .012$ )。FCV-19Sと課題・目的の存在の関連におけるスピリチュアリティの媒介効果は有意だったものの ( $ab = 0.040$ ,  $SE = 0.02$ ,  $z = 2.14$ ,  $p = .032$ , 95% CI [0.008, 0.091])、FCV-19Sから課題・目的の存在への直接効果は有意なままだった ( $c' = 0.13$ ,  $SE = 0.06$ ,  $z = 2.10$ ,  $p = .036$ )。結果を Figure 2 に示す。

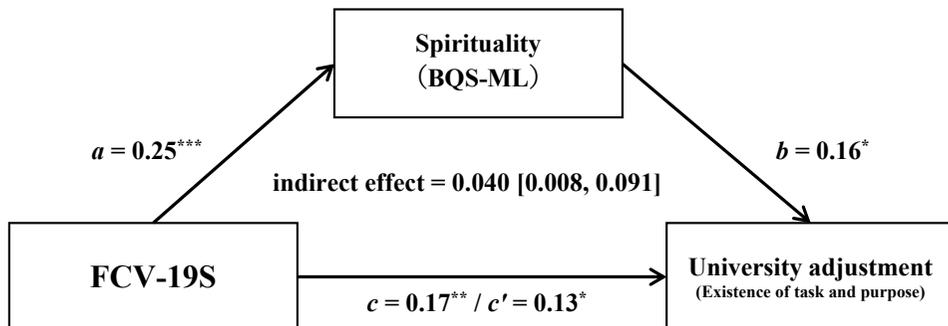


Figure 2 The standardized path coefficients and indirect effect in mediation analysis

Note. FCV-19S, the fear of COVID -19 scale; BQS-ML, the Search of Meaning in Life subscale from the Big Question Scale. Values in square brackets represent the 95% confidence interval (bias-corrected percentile method with 5000 replications) . Background confounders (age and gender) are not shown for simplicity.

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ .

## 考察

本研究の目的は、新型コロナウイルス恐怖と、大学適応感の関係における、スピリチュアリティの媒介効果を検討することであった。

媒介分析の結果より、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の指標である課題・目的の存在の関連は、スピリチュアリティの指標である大きな問い（人生の意味の希求）を媒介することで減衰し、またスピリチュアリティによる媒介効果は有意であったことから、仮説は支持された。すなわち、新型コロナウイルスに対する不安や恐れが強いほど、大学でやるべきことがやれている、という主観的な適合感も高いことが示唆された。ただし、そのような関連性は、人生の意味や幸福といった大きな問いについて思慮する程度に部分的に媒介されることが明らかになった。危機状況では自己の人生に関する関心が高まり（窪寺, 1997）、大学生の欲求と環境からの供給の適合度が高いほど学業満足度も高いことが明らかになっているが（Li et al., 2013）、本研究もこれらの知見と一部整合するものであった。

ただし、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の直接効果は有意なままであったことから、この媒介関係は部分媒介に留まっていた。また、Günaydin (2022) の調査と同様、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の間には、弱いながらも正の関連が存在することが明らかになった。これらの変数の関連性は、死の顕現化が目下の活動への関心や関与を高める、という先行研究の知見（Hofer, 2013; Ma-Kellams & Blascovich, 2012）と整合するものである。少なくとも本研究の対象者では、COVID-19に対して恐怖を抱く程度と、目下の学生生活から得られる充実感や達成感には一定の関連性が存在することが示唆された。コロナ禍2年目という状

況要因も考慮する必要はあるが、感染症への不安が存在することは、日々の活動への関与を著しく低下させるというより、制限がある中でも、正課授業や課外での活動に可能な限り積極的に取り組もうとする姿勢を多少なりとも促進する可能性がある。

## 応用的示唆

COVID-19に対する恐怖や不安が、実存的な問いを中心としたスピリチュアリティと正の関連を示す、という本研究の知見は、人生の意味に焦点をあてたアプローチの必要性を支持するものかもしれない。例えば、コロナ禍でそれ以前の日常が失われたことを集合的な悲嘆と捉え、その回復に向けたアプローチとして、人生の目的や意義を（再）構成するライフ・クラフティングの有用性が主張されている（de Jong et al., 2020）。ライフ・クラフティングとは、「自らの現在と将来の人生を積極的に振り返り、社会生活、キャリア、余暇などの重要な領域について目標を設定し、必要に応じて、それらの領域を自らの価値や願望と一致した形に変化させるための具体的な計画を立てたり、行動に着手したりするプロセス」（Schippers & Ziegler, 2019）と定義される。このアプローチでは、パンデミックによって、目標、人生の目的、人生の意義がどの程度阻害されたかをアセスメントし、その程度に応じて、価値や情熱を（再）発見したり、目標を達成したりするための働きかけが行われる（de Jong et al., 2020）。スピリチュアリティが適応感と関連することも踏まえれば、人生の意味を中心とした実存的な関心を、構造化された形で扱う取り組み（例：授業、ピア・サポート、カウンセラー等の専門家によるグループワーク）が高等教育においても展開されることで、一定の学生の大学適応を助長するのではないだろうか。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、第一に、因果関係を主張できないことが挙げられる。本研究は、横断的な調査を通じて変数間の関連を検討したにすぎず、これらの変数が因果的な影響関係にあるかは定かではない。今後は、例えば、COVID-19に対する情動反応を一時的に操作し、そのことが、人生の意味についての思索や、学業活動への関与度や満足度を向上させるのかを検討するといった実験的なアプローチを採用することも有益であろう。また、縦断的な調査を行い、変数間の前後関係をより厳密に検証するなどして、本研究で得られた知見の頑健性を確かめる必要がある。

第二に、研究協力者のサンプリングの問題が挙げられる。調査の協力を依頼した授業では、生きる意味や幸福感、恋愛等のトピックを扱う予定であることがシラバスや初回授業でアナウンスされていた。そのため、こうした大きな問いについて考えることに関心の高い大学生が調査協力者に含まれている可能性もある。したがって、本研究の知見の一般化については慎重を要する。

最後に、今後の課題として、その他の調整・媒介要因に着目した研究を実施することが挙げられる。例えば、コロナ禍で、意味中心コーピングが精神的健康の保護要因になることが明らかになっている (Eisenbeck et al., 2021)。意味中心コーピングとは、感謝や勇気、肯定的なリフレーミングのような、個人による意味の創造に基づく対処方略である。COVID-19に対する恐怖からスピリチュアリティが賦活され、大きな問いについて考えた結果、このような積極的なコーピング・スタイルが選択されることが、大学適応感や心理的適応を促進することも考えられよう。本研究で得られた媒介モデルをベースとしながら、その他の調整・媒介要因を明らか

にすることで、危機的状况における大学生の適応感のメカニズムについて理解を深めることができるだろう。

## 注

- 1 媒介変数として想定したスピリチュアリティが、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の関連を調整する要因である可能性について検討するため、階層的重回帰分析を補足的に実施した。分析にはR ver. 4.2.0 (R core Team, 2022)とRStudio ver. 2022.07.2 (RStudio Team, 2022), jtoolsパッケージ (Long, 2022)を用いた。ステップ1では、FCV-19Sとスピリチュアリティを独立変数、性別と年齢を統制変数、課題・目的の存在を従属変数として投入し、ステップ2では、ステップ1の変数に加え、中心化したFCV-19Sとスピリチュアリティの交互作用項を投入した。分析の結果、ステップ1のモデル ( $F(4, 238) = 5.66, p < .001, R^2 = 0.09, \text{Adj. } R^2 = 0.07$ )、ステップ2のモデル ( $F(5, 237) = 4.65, p < .001, R^2 = 0.09, \text{Adj. } R^2 = 0.07$ ) はともに有意だったが、ANOVAによるモデル比較は有意ではなく ( $F(1, 237) = 0.65, p = .421$ )、ステップ2のモデルにおける新型コロナウイルス恐怖とスピリチュアリティの交互作用項も有意ではなかった ( $B = 0.009, p = .421, 95\% \text{ CI } [-0.013, 0.031]$ )。

## 引用文献

- Al-Nasa'h, M., Awwad, F. M. A., & Ahmad, I. (2021). Estimating students' online learning satisfaction during COVID-19: A discriminant analysis. *Heliyon*, 7, e08544. <https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2021.e08544>
- 安藤 治 (2007). 現代のスピリチュアリティ—その定義をめぐって— 安藤 治・湯浅 泰雄 (編) スピリチュアリティの心理学 (pp. 11-33) せせらぎ出版
- Astin, A., Astin, H., & Lindholm, J. (2011). *Cultivating the spirit: How college can enhance students' inner lives*. Jossey-Bass.
- Capone, V., Caso, D., Donizzetti, A. R., & Procentese, F. (2020). University student mental well-being during COVID-19 outbreak: What are the relationships between information seeking, perceived risk and personal resources related to the academic context? *Sustainability*, 12, 7039. <https://doi.org/10.3390/su12177039>
- 千島 雄太・水野 雅之 (2015). 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文理学部の新入生を対象として— 教育心理学研究, 63, 228-241. <https://doi.org/10.5926/jjep.63.228>

- de Jong, E. M., Ziegler, N., & Schippers, M. C. (2020). From shattered goals to meaning in life: Life crafting in times of the COVID-19 pandemic. *Frontiers in Psychology, 11*, 577708. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.577708>
- Eisenbeck, N., Carreno, D. F., & Pérez-Escobar, J. A. (2021). Meaning-centered coping in the era of COVID-19: Direct and moderating effects on depression, anxiety, and stress. *Frontiers in Psychology, 12*, 648383. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.648383>
- Günaydin, H. D. (2022). The impact of social problem skills on academic motivation by means of Covid-19 fear: A SEM Model: Social Problem Solving, Covid-19, Academic Motivation. *Current Psychology, 41*, 427-436. <https://doi.org/10.1007/s12144-021-01665-z>
- 林 貴啓 (2011). 問いとしてのスピリチュアリティ—「宗教なき時代」に生死を語る— 京都大学学術出版会
- Hofer, M. (2013). Appreciation and enjoyment of meaningful entertainment: The role of mortality salience and search for meaning in life. *Journal of Media Psychology: Theories, Methods, and Applications, 25*, 109-117. <https://doi.org/10.1027/1864-1105/a000089>
- Horita, R., Nishio, A., & Yamamoto, M. (2022). Lingering effects of COVID-19 on the mental health of first-year university students in Japan. *PLoS One, 17*, e0262550. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0262550>
- 井上 順考 (編) (2013). 第11回学生宗教意識調査報告 国学院大学
- JASP Team (2022). JASP (Version 0.16.4) [Computer software].
- 神原 歩・山本 理恵・湯口 恭子・三保 紀裕 (2019). 初年次キャリア教育科目の受講が新入生の大学生活への適応感に及ぼす効果 キャリア教育研究, 37, 45-54. [https://doi.org/10.20757/jssce.37.2\\_45](https://doi.org/10.20757/jssce.37.2_45)
- 窪寺 俊之 (1997). 危機体験とスピリチュアリティ 神学研究, 44, 207-259.
- Li, Y., Yao, X., Chen, K., & Wang, Y. (2013). Different fit perceptions in an academic environment: Attitudinal and behavioral outcomes. *Journal of Career Assessment, 21*, 163-174. <https://doi.org/10.1177/1069072712466713>
- Long, J. A. (2022). jtools: Analysis and presentation of social scientific data (R package version 2.2.0) [Computer software]. <https://cran.r-project.org/package=jtools>
- Ma-Kellams, C., & Blascovich, J. (2012). Enjoying life in the face of death: East-West differences in responses to mortality salience. *Journal of Personality and Social Psychology, 103*, 773-786. <https://doi.org/10.1037/a0029366>
- Matsudaira, I., Takano, Y., Yamaguchi, R., & Taki, Y. (2021). Core belief disruption amid the COVID-19 pandemic in Japanese adults. *Humanities and Social Sciences Communications, 8*, 292. <https://doi.org/10.1057/s41599-021-00976-7>
- Midorikawa, H., Aiba, M., Lebowitz, A., Taguchi, T., Shiratori, Y., Ogawa, T., Takahashi, A., Takahashi, S., Nemoto, K., Arai, T., & Tachikawa, H. (2021). Confirming validity of The Fear of COVID-19 Scale in Japanese with a nationwide large-scale sample. *PLoS One, 16*, e0246840. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0246840>
- Munir, F., Anwar, A., & Kee, D. M. H. (2021). Online learning and students' fear of COVID-19: Study in Malaysia and Pakistan. *International Review of Research in Open and Distributed Learning, 22*(4), 1-21. <https://doi.org/10.19173/irrodl.v22i4.5637>
- 村上 祐介 (2012). Big Question尺度作成の試み 心理学叢誌, 8, 65-78.
- 村上 祐介 (2013). 大学生のスピリチュアリティにおける探究心媒介モデル 関西大学大学院心理学研究科博士論文
- 村上 祐介 (2016). スピリチュアリティ教育への科学的アプローチ—大きな問い・コンパッション・超越性—ratik
- 村上 祐介 (2020). 「大きな問い」に根ざした教育実践：「唯一無二の人生」を生きる主体の育成 梶田 叡一（責任編集）教育フォーラム65 人間力の育成：人間教育をどう進めるか (pp. 139-149) 金子書房
- 濁川 孝志・満石 寿・遠藤 伸太郎・廣野 正子・和 秀俊 (2016). 日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度の開発 トランスパーソナル心理学/精神医学, 15, 87-104. [https://doi.org/10.32218/transpersonal.15.1\\_87](https://doi.org/10.32218/transpersonal.15.1_87)
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—教育心理学研究, 53, 307-319. [https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3\\_307](https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3_307)
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人・環境の適合性の視点から—パーソナリティ研究, 12, 38-39. <https://doi.org/10.2132/personality.2003.38>
- R Core Team. (2022). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing. <https://www.R-project.org/>
- RStudio Team (2022). RStudio: Integrated Development Environment for R. RStudio, PBC. <http://www.rstudio.com/>
- Sasaki, N., Kuroda, R., Tsuno, K., Imamura, K., & Kawakami, N. (2021). Increased suicidal ideation in the COVID-19 pandemic: An employee cohort in Japan.

- BJPsych Open*, 7, e199. <https://doi.org/10.1192/bjo.2021.1035>
- Schippers, M. C., & Ziegler, N. (2019). Life crafting as a way to find purpose and meaning in life. *Frontiers in Psychology*, 10, 2778. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.02778>
- Şimşir, Z., Koç, H., Seki, T., & Griffiths, M. D. (2022). The relationship between fear of COVID-19 and mental health problems: A meta-analysis. *Death Studies*, 46, 515-523. <https://doi.org/10.1080/07481187.2021.1889097>
- 田崎 美弥子・松田 正己・中根 允文 (2001) . スピリチュアリティに関する質的調査の試み 日本医事新報, 4036, 24-32.
- Yamamoto, T., Uchiyama, C., Suzuki, N., Yoshimoto, J., & Murillo-Rodriguez, E. (2020). The psychological impact of 'mild lockdown' in Japan during the COVID-19 pandemic: A nationwide survey under a declared state of emergency. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17, 9382. <https://doi.org/10.3390/ijerph17249382>
- Yong, M., & Suh, H. (2022). University students adjusting to COVID-19 stressors: Exploratory and confirmatory factor analyses of the COVID-19 stressors questionnaire. *Frontiers in Psychology*, 13, 816961. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.816961>

#### 付記

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

#### 抄録

本研究の目的は、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の関連におけるスピリチュアリティの媒介効果を検討することであった。適応感の指標として大学生用適

応感尺度(大久保・青柳, 2003)の「課題・目的の存在」、スピリチュアリティの指標としてBig Question尺度(村上, 2012)の「人生の意味の希求」に着目した。調査は2021年5月下旬にオンライン上で実施された。自己評定式の質問紙に回答した教養科目の受講生のうち、最終的に252名(平均年齢 = 19.23歳,  $SD = 1.24$ ; 男性102名, 女性147名, その他・不明3名)を分析対象とした。媒介分析の結果、スピリチュアリティは、新型コロナウイルス恐怖と大学適応感の関連を部分的に媒介していた(indirect effect = 0.040,  $p = .032$ , 95% CI [0.008, 0.091])。最後に、本研究の限界と今後の展望が議論された。

#### Abstract

The purpose of this study is to examine the mediating role of spirituality in the relationship between fear of COVID-19 and university adjustment. This study focused on the Existence of Task and Purpose subscale from the Subjective Adjustment Scale for University Students (Okubo & Aoyagi, 2003) as an indicator of university adjustment and the Search of Meaning in Life subscale of the Big Question Scale (Murakami, 2012) as an indicator of spirituality. The survey was conducted online at the end of May 2021. In total, 252 university students ( $M_{age} = 19.23$  years,  $SD = 1.24$ ; Men = 102, Women = 147, Other = 3) taking the liberal arts class completed the self-rating scales. Mediation analysis revealed that spirituality significantly partially mediated the relationship between fear of COVID-19 and university adjustment (indirect effect = 0.040,  $p = .032$ , 95% CI [0.008, 0.091]). Limitations and implications for future research are discussed.

**Keywords:** Pandemic, meaning in life, academic motivation